



TITLE:

<批評・紹介>近世支那經濟史研究 小竹文夫著

AUTHOR(S):

岡本, 午一

CITATION:

岡本, 午一. <批評・紹介>近世支那經濟史研究 小竹文夫著. 東洋史研究
1943, 8(2): 126-129

ISSUE DATE:

1943-06-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145786>

RIGHT:

寫眞版が數多く挿入されてゐるので、文を読み且つは畫を眺めつゝ、考へつゝ味ひつゝ、時の經つものも忘れる程である。讀書の愉しみとか、半日の清興とかは、まことにこれと言ふものであらうか。『支那文學概説』の序に、先生は「文學は須らく味ふべきである、陶醉すべきである。然し食へども其の味ひを知らず、酔へば則ち足ると云ふやうな牛飲馬食の徒であつてはならぬ。一寸した鹽加減、微妙な風味にも靈感する味覺を養はねばならぬ」と述べてゐられる。樂しみつゝ考へるといふこと、それは筆者に取つて一つの理想でもある。それはまた研究の中に喜びを見出すといふことは、別なことのやうな氣もする。畢竟この「味覺」を養ひ得てこそ始めて入ることを許される境地であらうか。

(入矢義高)

近世支那經濟史研究

小 竹 文 夫 著

昭和十七年十月 弘文堂書房發行

A5判二九三頁 定價 參圓貳拾錢

輓近經濟學に於ける民族的特殊性といふことが頻りに喧傳せられてゐる。嘗てリストが、普遍的現象として論ぜられた經濟現象に民族的特殊性を強調して、イギリスの正統學派に對し獨逸經濟學を成立せしめたと同様、現時此の變轉期に際會せる我が國に於て、日本經濟學の成立、日本經濟法則の樹立が特に唱道せられてゐる。これは從來の西洋經濟學が、その思想的根柢に於て、日本人の有する人生觀と根本的に異なるが爲めである

と主張せられる土方成美博士の所論（日本經濟學への出發『日本評論』昭和十三年五月號）に従ふならば、日本人とまた正反對な程に人生觀を異にする支那人の營む經濟生活、それを研究の對象とする支那經濟學は、前記の民族的特殊性をより強度に具有するものであつて、支那經濟學の成立は更に容易であると言ひ得る。東亞新秩序建設の當事者たる我が國にとつて、此の大事業遂行の好伴侶なる友邦の實體を把握することは緊急の要務であるが、東亞新秩序建設は日本的道義の要請に基くとしながら、日滿支互助連環の關係を中心とする共榮圈思想を説くとき、經濟部門が如何に優越性を有するか知られるのであつて、此處に此の特殊なる支那經濟學の研究が必要とせられる所以が存するのである。

上海東亞同文書院大學教授小竹文夫氏の勞作にかゝる本書は、此の意味に於て、支那經濟理解に一助となる良書である。

著者は言ふ迄もなく、學生時代より半生を彼地に送り、朝夕その特有なる風物に接するの外、必要に應じて各地に調査旅行を試み、文獻による理論的檢討と實情調査とを兼ね併せ、正に鬼に金棒の感あり、他人の追隨し得ない強みを有してゐられる。

經濟史の研究は理論的に行はるべきものでなくして、事實に基いて考察すべきであるとすれば、著者の如きは最もよく此の鐵則を踏襲したものといふべきであつて、其の所論の妥當性は、正に此の點に在るのである。

本書は『經濟史上における近世支那社會の性質』『明清時代に

おける外國銀の流入』『清代における銀・錢比價の變動』『近世支那租税上における物納と錢納』『清代の耕地開墾』『清代における人口』の諸篇に分れてゐる。著者によれば此等は、「十數年前の舊稿」であり、「骨を噛むがごとき無趣味なものばかりである」と序文に於て斷つてゐられるが、肥肉はおろか薄皮さへ乏しい今日、かゝる貴重な骨は洵に得難き資材であつて、一見珍奇ならざるが如くして、而もさく／＼と噛みしめる體中、眞に大牢の滋味を攝取し得るであらう。

卷頭の『經濟史上における近世支那社會の性質』は、他の諸篇と趣きを異にし、「近世支那社會の性質を根本的に考へ」たものであり、「從來支那社會をもつて封建的社會とする論が、多く支那の社會經濟を取扱ふ人々によつて立てられてゐるので、こゝに敢へて經濟史上の問題として挿入したのである」と前置きしてゐられる。緒言には『封建的社會説への抗議』として「封建」の語義につき、日本、西洋、支那を對比し、封建的社會の特徴を、(一)地方割據政治、(二)封土制、(三)身分階級、(四)領地經濟、(五)制限的自由、(六)封建的風尙の諸點に分ち、近世支那社會の態様よりして、斯かる「社會が封建的社會なりとは如何にしても言ひ得ない」と斷言し、近世支那社會の性質を解明するためには、支那歴史の時代區分の必要あるを説き、これが決定すれば、近世支那が封建的なりや否やの問題は敢へて論究を俟たないときへ言はれてゐる。支那史の時代區分の至難なることは、現在尙定説を見ない處であるが、著者は宋代以後清末

に至るまでを近世としてゐられる。而して近世支那社會が如何なる名稱を以て呼べるべきかに就いては、之を表現するに適切な名稱はなほ考究を要するとし、清末以後現在に至る僅々數十年間すらも「官僚的社會が崩壞して新しい社會を形成せんとするいはゆる過渡期的社會」であるとして、簡潔適費なる表現の困難なるを物語つてゐられることから考へても、千年に及ぶ近世的支那社會に通する具體的で適切な名稱は、何人とも難も要求する方が無理であらう。此の場合、橋瑛氏や陶希聖氏の謂ふ官僚的前資本主義社會といふ名稱が、大體著者の意見とも一致するらしいが、これも尙不十分であるとせられてゐる。

『明清時代における外國銀の流入』は、「近世支那が銀貨國になつた徑路を記述したもので」あつて、其の原因に就いては、加藤繁博士が雲南等の銀鑛開採の影響を重視してゐられてゐるのに對して、歐米諸國との貿易の結果、明末以來夥しく外國銀が流入した爲めであるとしてゐる。大多數の國家が、金本位制度を採つてゐるのに反して、最近まで銀本位制度によつてゐた支那が、如何にして斯く成つたかを、日本、フィリッピン、イギリス、アメリカ等より銀の流入せる數量を表示することによつて論證してゐられる。

『清代における銀・錢比價の變動』に在つては、此處にいふ「銀・錢の比價とは、銀貨と銅錢との交換比率を指す」のであり、清代では兩者とも相並んで完全なる法貨であつたから、其の間に法定の比價があつたが、その時々社會の銀銅に對する

需要關係によつて、當然別個の市場比價を發生せしめた。此の銀・錢の比價の變動更に之に基く錢價の變動は、錢價を以て日常生計を立てゝゐる中流以下の庶民階級に對して、常に大なる影響を與へたものであり、近世支那社會を研究せんとする者にとつて忽せにすることが出来ないものである。本篇は、順治、康熙より順次に同治、光緒に至る迄の銀錢比價の變動——換言すれば錢價の騰落を明かに記述し、道光、咸豐年間が最も低落したことを證してゐられる。

『近世支那租税上における物納と錢納』は、『近世支那の納税が文獻に見えたる現物納的記錄にもかゝらず、實際には多く金錢納特に銀をもつてせらるゝものであり、末期においては漕米のことも國家採買の性質をもつものであることを述べた。』ものであり、一概説、二錢納、三銀納、四漕糧に分つて説いてゐられる。特に漕糧が清代にも實納糧納として存在したことについて、論者或ひは之を以て實物租税としてゐるに反し、貨幣經濟の發達せる明清時代に、かゝる實物納の存在を否定し、「特殊の必要より行つた一種の採買であり、純粹の租税そのものではなかつた」と説いてゐられる。『清代の耕地開墾』に於ては、農業經濟を基本とする支那に在つて、清代における未耕地の開墾問題よりして、「一般に支那における土地利用の程度方法、農田の集約的經營狀況」を説き、「これと支那生産力および社會生活との關係等」を取扱つてゐる。支那の文獻に表はれた田畝統計は、「主として各地方政府が田賦收入を測定して中央送金ある

ひは送糧の標準としたいはゆる定額の合計であつて、定額外の調査不行届あるひは隠蔽されたる耕地等は含まれてない」のであるから、「奏銷冊の數額と實際その時の耕地面積とは全く別物」であることに留意し、先づ清初の順治以降民國に至るまで各時代における田畝統計を吟味し、その比較によつて荒地開墾の概況を調査して、最後に實際の耕地面積を推定した。之が記述に當つては、各時代毎に地方別に詳細なる田畝數を表示してその増減を明かにしてゐる。其の結果、清初比較的にかつた荒地も漸次開墾され、嘉慶年間には邊境の開拓を必要とした程であつた。よつて清初における實際耕地面積は約千二百五十萬頃であつたのが、光緒時代には約千五百五十萬頃、民國時代には約千六百八十萬頃と推定された。然し乍ら此の實際耕地面積と奏銷冊記載の田土數額とは「いづれの時代にもそれ〴〵約五百萬頃乃至六百萬頃の差異があつて、これだけの額が脱税あるひは免稅されてゐた」と結論せられてゐる。

最後の「清代における人口」に就いては、「支那人口の近世における實相を推定したもの」であつて、支那の戸口統計は、古來脱漏又は官吏の作偽多きこと、土着の民戸を主とすること等からして、常に「實際の數額より著しく少なきを普通とし」てゐるのに鑑み、當時社會の狀況に照らし、記錄されたる統計を訂正して實相を算定せんとしたものである。先づ清代以前の人口を一通り調査し、次いで清朝を初中末の三期に區分して、各々の人口をば東華錄その他支那側の文獻のみならず、マルチニ

以下多數の外人の報告に基いて精密に検討してゐられる。

以上が所收論文の概要であるが、巻頭の「經濟史上における近世支那社會の性質」以外は、何れも明・清時代の貨幣耕地人口等の經濟事實そのものの發展的過程を調査したものであつて所謂食貨志的敘述であり、文獻に表れたる額數より歸納すれば、當然かゝる結論は導き出されるのであるから、論旨は誤謬が無く一々首肯し得るとしても、平盤にして些か精彩を缺く憾みがある。尤も此の缺陷は、經濟史が經濟現象に關する事實の歴史である點に於て、經濟思想史や歴史の經濟的觀點に立つ説明と異なり、理論構成より事實の蒐集に傾注する結果より將來される爲めであるが、これこそ經濟史自身に内在する弱さであり、此處に經濟史に對する吾人の慍りなきがあるのである。故に斯かる不滿感を以て本書を遇するが如きは、經濟史の本來の立場を理解しないものと言へるであらう。最後に、煩雜なる數字の検討を厭はず整理表示して、今後の近世支那經濟專攻者に好個の指針を與へられた著者の長年の御努力と其の勞苦に謝意を表して、此の蕪雜なる紹介を終る。

(岡本午一)

アジア民族誌

E・ラッツェル原著
向坂逸郎譯

昭和十八年一月 生活社發行
A5判三八八頁 定價 四圓六拾錢

大東亞戰爭の頗かしい進展に伴うて、大東亞諸地域の民族問題は我々の腦裏に管てなき大いなる地位を占めることとなつ

た。而して民族そのものの理論的検討は夙に高田保馬博士を始めとして、小松堅太郎・新明正道・高坂正顯・白井二尙諸氏によつて續けられ、數々の成果が生み出され來つたのであるが、民族の具體的現象に關する探求も大戰の進展と共に愈々拍車を加へ來つた觀がある。民族學關係の著作・翻譯の盛行は何よりも雄辯に此の事を物語る。

本年初頭、先にラッツェルの「獨逸」(中央公論社刊)を邦譯された向坂逸郎氏が、同じラッツェルの大著「Völkerkunde」の中、アジア民族の部分を邦譯刊行せられたのも、そのよき一例であらう。ラッツェルの「Völkerkunde」は一八八五—八八一年に互つて刊行されたものにして總計二四〇〇頁許、Gründzüge der Völkerkunde, Die Naturvölker Afrikas, Die Naturvölker Ozeaniens, Amerikas und Asiens, Die Kulturvölker der Alten und Neuen Weltの諸部より成るが、本譯には Dritter Band, Die Kulturvölker der Alten und Neuen Welt 中より Innerasien und der innerasiatische Völkerkreis, Südasien und der indische Völkerkreis, Ostasien und der osiasatische Völkerkreisの三篇を撰んで邦譯されたものである。尤も三篇全部の譯ではなく、Des asiatische Steppengebiet und Wüstengebiet, Südasien, Japaner und Koreanerの諸章を缺く。邦譯の部分は左の如し(邦譯の章名による)。

(一) 蒙古人、チベット人及びトルコ諸民族の概説
(二) 蒙古人とトルコ諸民族